

包み紙、綿棒から豆紙人形

東京・神楽坂で母娘作家展

病を乗り越えて80歳代で紙人形作家となった女性と、その遺志を継いだ娘の作品展「豆紙人形・母娘展」が5月23～27日、東京・神楽坂のギャラリーで開かれる。

展示されるのは、2006年に亡くなった紙人形作家のマサコ・ムトーさんと、次女でエッセイストのヒロコ・ムトーさん(66)の作品計170点。和菓子



マサコ・ムトーさん作の「竹馬」と、ヒロコ・ムトーさん作の「金魚すくい」

な材料を使い、大正から昭和にかけての子どもたちの遊びや祭りなどの様子を、手のひらに乗るほどの小さな紙人形で再現している。

マサコさんは右目を失明し、左目も白内障だったが、88歳で豆紙人形を作り始めた。大腸がんなどで入院を繰り返しながら、93歳で亡くなるまで約300点を制作。展覧会は海外でも開かれた。マサコさんはよく「毎日が始まり。今日を悔いなく生きれば、何があっても怖くない」と語っていたという。

次女のヒロコさんは、いじめ防止を訴える朗読講演の活動を全国の小中学校で続けている。3年前に夫を亡くした際、マサコさんの言葉を思い出して勇気づけられたといい、昨年、マサコさんの作品を模して紙人形作りに挑戦し始めた。ヒロコさんは「何歳になっても、新しいことにチャレンジできるということが伝われば」と話す。

会場は、「アートガレージ カグラザカ」。入場無料。問い合わせは、同ギャラリー(03・5227・1781)へ。